

われわれは、次に、催眠状態で経験することができるとさまざまな効果を検討することにしよう。便宜上、誘導にあまりよく反応しない被験者たちによってよりはむしろ、被催眠能力に恵まれた被験者たちによって経験されるものとしての効果について述べることにする。

催眠の効果

誘導の有効性についての最初の正式テストは、被験者の目が誘導の一定の時点までにおのずから閉じるかどうかである。もしそうでなければ、催眠術師は被験者に故意に目を閉じるよう求める。

被験者は、次に、腕を水平にまっすぐに伸ばし、その腕がとても重くなっていくと想像するよう求められる。腕は被験者にとって重く感じられ、重すぎて持ち上げていられなくなり、下がり始め、結局は膝の上に落ち着く。

今度は、被験者は、両腕を約一フィートほど離して水平に伸ばす。ある力が両手の間に発生し、両手を離すように押しているという暗示を与える。被験者たちは、しばしば、これを磁性の反発力のよくなものとして経験する。彼らの意識的な意志力なしに、彼らの手は互いに反発し合い、離れ去る。

それから知覚的な暗示——すなわち、蚊が一匹部屋の中に入ってきたという——が与えられる。このうるさい蚊は被験者の頭の上にとまる。ピシャッ！ 感応しやすい被験者は、蚊に刺される前にそれを殺す。彼らは、後で、そのブーンという音が聞こえ、それがとまるのを感じたと報告する。

催眠術師はさらに、被験者が甘さや酸っぱさを味わうよう暗示をかけることによって、知覚を修正する。被験者の口はすばみ、そして味覚経験はかなり強烈かもしれない。

右の暗示は、かなりの数の人々によって、ある程度まで、強烈にさえ、経験されるかもしれない。以下のものはより困難であるが、しかし才能に恵まれた被験者によって完全な現実感をもって（時には現実よりも「より現実的」に）経験される。

被験者は、再び、腕を伸ばすよう求められる。今度は、腕がひとりで硬直していき、あまりにも硬直しすぎて、曲げようとしても曲げられなくなるであろう、と彼は告げられる。ついに、彼は腕を曲げてみるよう挑まれる。大変な努力にもかかわらず、腕は曲がらない。彼は腕に対する正常な制御筋力を失ってしまったのである。

ここでわれわれは、身体と現実についての変性知覚から離れ、内面に入っていく。被験者は、夢、鮮明な夢を見るだろうと告げられ、しばらくの間沈黙が与えられる。後でその体験を詳しく話すよう求められると、彼はしばしば鮮明な夢を報告するであろう。それらの夢の現実と夜見る夢を比較するよう求められると、それらの夢は時にはちょうど同じくらい現実的であり、時にはもっと強烈であると被験者たちは報告する。催眠術にかけられるというのはどのようなものを夢は表象するであろうと暗示をかける場合におけるように、夢の中身もまた暗示による影響を受ける可能性がある。

年齢退行は、より劇的な催眠現象の一つである。被験者は、時間を遡っており、彼はもはや成人の自分ではなく、ずっと若くなっていると告げられる。ある年齢での誕生パーティーといった、特定の時間への退行が一般的に暗示される。効果の程度はさまざまであるが、もっとも感応しやすい被験者たちは、自分自身のことを再び子どもとして経験する。彼らの話し方や書き方の様子が変わり、自分の人生の早い時期のことを思い出しているというよりはむしろ、あたかもそれを再体験しているかのように、彼らは感じるのである。

とりわけ劇的なテストは、アナスミア *anosmia*——嗅覚不能——である。私がそれを執行し、それが通過されるのを見てきた回数にもかかわらず、それは私にとつて驚きであり続けている。被験者に、彼がなんの臭いもかくことができないと暗示した後、家庭用アンモニア瓶を彼の鼻の下に置き、よく臭いをかぐよう求める。才能に恵まれた、深く催眠術にかかっている被験者は、ぐっと臭いがかぐが、なんの反応も示さず、自分が何かの臭いをかいたことを否定する。アンモニアの臭いは、われわれの通常の意識状態ではきわめて強烈なだけでなく、また痛みを伴う。フォームCではそれ以上はテストされないが、他の標準化された催眠手順では、被験者に痛みを感じる事ができないという暗示を与えた後、さまざまな苦痛な刺激が与えられる。この、痛みを減じたり除去したりする能力は、催眠の持つもっとも困惑させる（そして役に立つ）側面の一つである。

われわれは、外的な感覚が再解釈または除去され、そして外的な知覚が夢に取って代わられるのを見てきた。それらはまた、幻覚に陥る知覚——それについてのなんらの物理的根拠もない知覚——に取って代わられることもできる。次のテストで、被験者は、実験室の秘書が彼にいくつかの予備的な質問をするのを忘れたのだが、しかし今、実験室内のインターホン越しにそれらの質問をするだろう、と告げられる。感応しやすい被験者は質問を聞き、それに答えるのだ！

今度は、知覚の極端な修正、否定的な幻覚がテストされる。被験者は、目を開けると、目の前のテーブルの上に二つの箱を見るだろう、と告げられる。実際には箱は三つあるのだが、非常に感応しやすい被験者は二つしか見ないであろう。目を開けたまま催眠状態を維持することもまた、非常に才能に恵まれた被験者の特徴である。

最後に、催眠から目覚めると、被験者は起こったことについて何も覚えていないであろうと催眠術

師は暗示をかける。しかしながら、催眠術師が一定の手がかりを与えると、起こったことについての彼の記憶が戻る。被験者は今や催眠状態から覚醒させられ、出来事について質問される。感応しやすい被験者は、入って来て催眠術をかけられ、腰かけてリラックスし、そしてそれ以外のことは何も思ひ出せないのので、眠り込んでしまったに違いないと感じる、と報告するだろう。だが、手がかりを与えられると、完全な記憶が戻る。

この特定の被催眠性スケールには含まれていないが、普通にテストされるもう一つの一般的催眠効果は、催眠後の暗示である。被験者が催眠状態にいる間に、彼は、催眠状態から目覚めた後しばらくして、催眠術師が「今日はとても暖かい」と述べるといったある種の手がかりを与えるだろう、と暗示される。被験者がこの手がかりを聞く時はいつでも、被験者は、ドアを開けてホールの外を見るというような何か定められたことをするであろう。催眠術師はまた、被験者はこの催眠後の暗示が与えられたという記憶を持たないであろう、と暗示する。

催眠術師が被験者を催眠状態から覚醒させた後、被験者がおそらくは通常の意識状態にある時、催眠術師は時々手がかりを与えるであろうが、手がかりをさりげなく日常会話に織り込むようにするのが普通である。感応しやすい被験者は、自分が催眠後の暗示に反応しているということを思い出すことなく、暗示された行動を実行するであろう。

たとえば、ホールのドアを開けて外を見るとすると、これが何度か起こった後、たいていの人はおかしなことをしたと思うであろう。才能に恵まれた被験者は、求められもしないのに、しばしば、自分の奇妙な行動に合理的説明を与えようとするであろう。「外で奇妙な音が聞こえるように思ったんです」とか、「ここは風通しが悪いので、少し空気を入れているのです」など。催眠後の暗示は、い

かにわれわれが自分の行動の理由にすっかり気づかないことがありうるかを示す際立つた例である。その大きな力にもかかわらず、催眠は催眠術師に被験者をすっかり支配する力は与えない。もし催眠術師が、たとえば誰かを銃で撃つといった、何かきわめて危険あるいは反社会的なことを被験者にするよう暗示をかけたら、被験者は、普通、時には非常に動転して、そのような暗示を無視するかまたは催眠状態から覚醒してしまうであろう。これは普通、暗示は、われわれのより深い確信と衝突しない限りよく作用する、ということの意味していると解釈される。

もっと困惑させる解釈があるのだが、それは合意的トランスに関する次章をお読みになると、より明瞭になるであろう。誰かが催眠術にかけられる時、催眠術師は、元々の催眠術師以外のいかなる人によっても被験者は催眠術にかけられることはできないであろう、という催眠後の暗示をかけることができる。この暗示が消え去るまで（いくつかの場合には数時間で済むかもしれないし、他の場合には数カ月かかるかもしれない）、被験者は他の誰かによる催眠誘導に感応せず、元々の催眠術師によって催眠術にかけられる状態に留まるであろう。この暗示は、被験者は他の人によって催眠術をかけられることはできるであろうが、しかし一定の種類の暗示には感応できないであろう、というふうには修正することができるだろう。通常の意識の構造とそのトランスに似た性質を吟味してみると、催眠における反社会的な暗示への抵抗は、部分的には道德的な力を表わしているのかもしれないが、しかしそれはまた単に、元々の催眠術師——文化——が、後の変化を封じる催眠後の暗示に似たものを働かせてきたということを示しているのかもしれない、ということがわかるだろう。

催眠の現実に対する不信

もしあなたの心の一部がいささか懐疑的になつていたら、それはよく理解できることである——とりわけ、もし私が、フォームCに含まれているものよりもっと劇的な催眠現象があると言ひ添えたら。われわれは、真に才能に恵まれた被験者をテストするために、二つの様式のスタンフォード被催眠性スケールを持っているのである！

私は、これらの標準化されたテストを用いて人々に催眠術をかけ、これらの現象を何十回となく見てきた。私は繰り返し経験してきたが故に、それらの現実を受け入れなければならない。それとも私は……？

結局のところ、それらには魔術じみたところがある。人々を極端な行動へと押しやるためのなんの薬物も、脳のなんらの手術も、いかなる強力な感情もなかった。見知らぬ二人がごくありふれた部屋に坐っていた。催眠術師と呼ばれている人は、被験者と呼ばれる人に話しかける以外何もしなかつた。けれども、被験者の現実は、劇的な、見たところ不可能な仕方に変化した。魔術師の呪文（言葉）が現実を変えたとしたら、それは魔術ではないだろうか？

催眠の説明

催眠を理解し説明しようとする場合に、ほとんどの理論家は大きく分けて二つの一般的類型——軽信派と懷疑派——に当てはめられる。軽信派の理論家たちは、被験者の行動と報告をほぼ顔面どおり

に受け取る。すなわち、被験者がアンモニアの臭いをかいたことに反応せず、なんの臭いもかかなかったと報告するのは、彼がなんの臭いも感じなかったからである。懷疑派の理論家たちは、催眠という現象を元々ありそうにない、あるいはありえないものとみなし、したがって被験者がある種のふりに熱中しているものとみなす。すなわち、彼はアンモニアの臭いをかぎ、痛かったのだが、しかしあたかも臭いを感じなかったかのように振る舞い、そして自分の体験について嘘をついたのである。

経験的催眠説

一番目の部類の理論家たちに対する「軽信派」という呼称は、懷疑派の理論家たちによって造り出されたものにちがいない。なぜなら、軽信 *credulous* という言葉には「ばか正直」という意味合いがあるからである。これらの理論家たちは、催眠術にかけられた被験者の行動と報告を彼らの経験の適度に正確な指標として受け取っているのだということを、より中立的な仕方ですすため、私は「軽信派」の代りに「経験派 *experiential*」という用語を用いることにしたい。

経験派の理論家たちは、催眠術にかけられた被験者たちの経験をさらに説明しようとする段になると、いくつかの問題にぶつかる。なぜ彼らの経験はあんなにも深く変性しうるのだろうか？ 主要な系統の憶測は、催眠は、眠りや薬物誘導状態に匹敵しうる、神経系の深い生理的变化を伴うというものであった。この理論にとってはあいにくなことに、こうした変化は発見されずにきた。脳波は大まかな尺度ではあるが、催眠術にかけられた被験者たちの脳波は通常の状態にある人々のものと同様で同じなのである。体内のその他の生理的な変化は、通常は催眠の一部であるリラクゼーションと結び

ついでに判明している。けれども、暗示によるリラクゼーションとそれに結びついた生理的変化を除去することはできても、依然として人は深い催眠状態に留まることのできるのである。

われわれの計器が充分進歩し高感度になった暁には、われわれはおそらく、催眠における種の生理的変化を発見するであろう。たとえば、否定的幻覚と共に呼び覚まされる脳の潜在能力の変化についてのヒントがすでにあるが、しかしこの時点で催眠とは何なのかを説明しうるほどの大きな変化はないのである。それにもまして重要なことは、ただ人に話しかけることだけで、どうしてあのような深い変化が引き起こされるのか、いまだに説明できずにいるということである。

懐疑的催眠説

懐疑派の理論家たちは、催眠に結びついた行動は実際は「正常」である、すなわち、われわれの通常の能力の範囲内にある、と想定する。それらの行動は、稀で、見慣れていないだけのことである。催眠と呼ばれる文脈の中でそれらを多数一緒に目撃すると、われわれは、誤解して、それらには何か特別なものがあると考えるのだ。さらに、これらの理論家たちは、普通、暗示へのあからさまな追従は、たいてい、演技の問題であると推論する。被験者はなんらかの神秘的な催眠「状態」にいるのではなく、正常な状態で催眠術にかけられた被験者の役を演じているのである。

懐疑派の理論は、催眠が「動物磁気」としてアントン・メスマルによってわれわれの文化に紹介されて以来、ずっとわれわれと共にあった。たとえば、インドに駐在していた英国人医師、ジェームズ・エスダイルは、外科手術のため多くの患者に麻酔をかけるのに催眠を用いることができることを

発見した。当時は薬品による麻酔はまだ発見されていなかった。外科手術を受けた患者の九十五パーセントは、ひどく苦しんだだけでなく、手術が元で死亡していた。エスダイルは、自分のインド人の患者が痛みを感じないだけでなく、九十五パーセントが手術後生き延びた、と報告している。

英国の医学雑誌は彼の論文を公表することを拒否した。英国に戻ると、彼は「英国内科・外科医学校」の同僚のためにデモンストレーションを行った。片足に壞疽を患った男性に催眠術をかけた後、彼は同僚たちの目の前でそれを切断したのだが、その間、その男性は静かに微笑みながら横たわっていたのである。彼の懐疑派の同僚たちの結論はいかに？ エスダイルは彼らをかっいだのだ。彼は金貨が欲しい頑強な浮浪人を雇って、そこに寝かせ、なんの痛みも感じていないふりをさせたのだ。その当時は、非常に頑強な浮浪人がいたにちがいない。

催眠の三つの次元

実は、催眠誘導に対しては多種多様な反応があり、したがって、経験派的立場も懐疑派的立場も共に、どのような特定の時にどのような特定の人について彼らが語っているかに応じて、部分的に本当なのである、と私は信じる。

卓越した催眠研究家であるロナルド・シヨールは、催眠の深さの三つの次元、すなわち、誘導の結果として単独または連結的に起こりうる、三種類の異なる心理的機能の変化について語った。これらの次元とは、役割演技への熱中、トランス、および年齢退行であった。われわれの心的機能のバリエーションもまた、これらの次元に沿って日常生活で起こる。

役割演技への熱中

役割演技という概念はわれわれが皆理解している何かである。俳優は舞台上でハムレットを演じるが、しかし彼は、自分はハムレットを演じているだけで、自分がハムレットではないことを知っている。われわれは、人生において明らかに人為的なさまざまな役割を演じる。それらはわれわれではないのである。たとえば、研究室の秘書がインターホン越しにいくつかの質問をする必要があると告げられた時、深く催眠術にかけられた被験者という役割を演じている被験者は、その状況で質問されそうな種類の質問を考えつき、いくつかのものもつともな答えを口に出して言う。けれども、恣意的な役割演技として出発するかもしれないものが、変化しうるのである。役割演技への熱中という概念は、ただ役割を恣意的に演ずる代りに、演じている役割とわれわれが同一化し始める可能性があるという事実をさす。われわれはそれに入れ込む。それが単なる役割であることを忘れるのだ。それが引き継ぐ可能性があり、そして役割がわれわれを演じるのである。

若干の人は、単に、誘導に感応して催眠術をかけられた被験者の役を演じることができ、その役割は、ほとんどの人にとっては、さまざまな程度まで自動的で、無意識的になり始めるであろう。極端な場合、役割への熱中に深くはまった被験者は、深く催眠術にかけられた被験者の全ての外面的挙動を示すであろう。事実、自分がなんらかの選択をしているということが彼には思い浮かばない。彼は、催眠術にかけられた被験者はどのように振る舞うかについて自分が抱いている期待に自動的に従うのである。彼は自分が役割を演じていることを忘れるのだ。けれども、もし後で自分の内的な経験について尋ねられれば、自分はなんら超常的なことは経験しなかったと報告するだろう。彼の腕は

重く感じられなかったのだが、しかしあたかも重く感じられたかのように彼の腕を下げることで以外のいかなるなすべきもつともないように思われたのである。役割演技への熱中は一種の同一化であり、われわれが第十一章と十二章で吟味するであろう強力なプロセスである。

トランス

トランスの次元とは、それによってわれわれが自分の経験を自動的に評価する知的な枠組の消失をさす。シヨールはこの枠組のことを「一般的現実志向 *generalized reality orientation*」と呼んだ。私は、「一般」という言葉が含意する、あの明白な真実性という性質を取り払い、われわれの現実への志向は、何が現実で何が重要であるかについてのわれわれの特定の文化の同意の産物であることが大いにあるということをわれわれに思い出させるため、それを「合意的現実志向 *consensus reality orientation*」と改名した。われわれは、後の諸章でこれらの文化的要因を詳しく扱うであろう。

普通は、誰かがあなたに何かを話しかけたら、それは、直ちにかつ自動的に、CROの一部を成している蓄積された知識に関して評価される。たとえば、もしあるセールスマンが「これは市販されているうちで最良の製品です」と言ったら、あなたはそれを、直ちにかつ自動的に、あなたのCROの知識——販売当事者たちは、自分たちが販売シェアを持っているものについて大げさなことを言い、嘘をつきさえるという——に照らして評価する。あなたは、話は聞くけれども、しかしその本当の価値には疑問があるという制限をそれに加えるのだ。

催眠誘導に感応してCROが消失するにつれて、催眠術師の陳述が自動的に評価されることはなく

なる。たとえば、誘導の始めに、催眠術師は「いつの間にか眠り込むというのは、さぞかし気持ちがいいことでしょうね」と暗示をかけるかもしれない。CROが十分に働いていれば、あなたはその陳述についてこう思うかもしれない。「私は、今、本当に眠りたいと思ってるだろうか？ 眠りは本当にそんなに気持ちがいいだろうか？ もし眠ってしまったら、何かを見逃してしまわないだろうか？ 彼は私がもう眠たがっているか？ 暗示をかけたが、しかし私は本当に眠気を感じているのだろうか？」 あなたがより深く催眠術にかけられていき、CROの消失プロセスが自動的に進むにつれて、陳述は、事実を単純に、評価抜きで述べたものとなる——いつの間にか眠り込むことは、さぞかし心地よいことだろう。あなたの体験は「解離され」、もはや関連した情報と自動的または意識的に結びつかなくなる。このポイントについては後で詳しく検討することにした。

トランスの次元とは、したがって、その中で経験が孤立して、——あなたの一般的CRO知識に関連した自動的または意識的な評価なしに、——起こる、そういう次元である。評価は少しもないか、あるいはトランス状態に特有の一组の特殊化した知識に関してのみ評価が行われる。トランス次元で深く催眠術にかけられた被験者は、あらゆる典型的な現象を経験する。それらは彼にとって完全に現実であり、そして暗示されたことを彼があたかも経験しているかのような彼の外的な感応は、事実、彼の内的な経験の率直な、ごまかしのない反映なのである。

年齢退行

催眠の年齢退行次元は、われわれが皆、子供だった時に両親との関係で持った経験から徐々に発展

する。われわれは小さく、無知で、ほとんど無力であり、ほぼなんの自己理解も、内面の支配力も備えていなかった。両親は巨人であり、われわれの理解をはるかに超えた知識、支配力、パワーを持っていた。われわれと比べれば、彼らは神様のような存在だ。われわれは、彼らについての自動化した知覚——神様のような存在、われわれを理解している存在、絶対的な従順を期待するものとしての存在という——を發達させた。両親は、順に、われわれの身体的欲求の面倒を見、われわれを愛することによってわれわれに報いた。われわれの期待はどうかやら間違っていたようである。

われわれの世慣れた成人の自己の表面下には、この一組の自動的な態度が依然として存在しており、われわれの知らぬ間に顔を出す可能性があるのだ。フロイトはそのことを転移として語った。われわれは、子供のようなこの認識的／感情的態度を世の中の何人かの人へと転移し、しばしば混乱した不幸な結果を招く。仮にあなたの上司があなたになんらかの業務遂行を頼んだとすれば、それをすることに、あなたの中の心の一部は彼をあなたの父親に仕立てる。あなたの父親がどうあなたに関わるべきかについてのあなたの全ての期待が、あなたと上司との関係に影響を与え始める。上司は、自分があなたを愛し、あなたのもっとも深い感情を理解していて、しかもあなたからあからさまにそのことを表明されるまでもないことになっていることなど露ほども知らないのだ。彼の態度は、そうしたあなたの要求を無視することによって、あなたを拒絶するように思われる。あなたは、彼が自分を嫌っているのだと思いは始める。誤解の上に誤解が積み重なっていきうるのだ。

催眠誘導への一つの感応は、あなたが両親の一方（または両方）に対して取っていた態度を、知らず知らずのうちに催眠術師に転移することである。催眠術師は、今や、あなたが子供だった時に両親が持っていたような、魔術的な性質を持っているのだ。もちろん、彼が暗示することは本当になる。

もしあなたが催眠術師／両親の言うことに従わず、それを経験しなかつたら、それは悪いことであろう。これは、催眠手順に沿って時折見られる強烈な情動の発現、ならびに催眠術師の暗示へのあからさまな外面的追従を助長する可能性がある。内面的に、暗示は大きな現実感と共に経験されるかもしれない。

催眠術をかけられた被験者は、これらの次元の一つまたはそれ以上に沿った強度の心理的变化を示す可能性がある。これら変性した心理的機能の全ての次元は、日常生活において、われわれが自覚しているよりはるかに多くの影響をわれわれに及ぼすのである。

「トランス」への嫌悪

催眠に関する以上の説明と催眠の根底にある内的プロセスのいくつかを書くにあたり、私は、大部分、科学的に中立的なスタイル——すなわち、客観的科学家を特徴づけられると思われている「ここに事実があり、私はそれについていかなる判断もしない」的態度——で書いた。たとえそうだとしてみても、催眠術にかけられた被験者についてあなたはどんな感じを抱かれるだろうか？ 被験者はまず第一に催眠術をかけられることに同意したのだが、しかし彼は他の誰かに自分の意志を引き渡し、より「原始的な」心理的機能に屈したのではないだろうか？ 催眠術師は、今や、被験者の現実に対するきわめて強大な（しかし、完全ではない）支配力を持っている。

思うに、催眠などのトランス状態に対する嫌悪が起こるのは、部分的には、われわれがあるレベルで非常に不愉快な事実を認めるからである。われわれはすでにトランス状態にある。われわれは、あ

れこれの種類の特ランスの中で人生のあまりにも多くを過ごしてきた。われわれの行動と内的な経験は他人によって強力に支配されており、変わる見込みはほとんどない。催眠は、その中でわれわれが行う特定のことが社会的に見慣れないが故に、明白な「トランス」として目立っているだけのことなのだ。

現代の心理学的研究は、われわれがトランス状態にあるという事実を発見することなく、それによってトランス的状态が誘導され維持されるメカニズムの多くを発見してきた。グルジェフはわれわれのトランス的状态を認識し、この目覚めたままでのトランスにわれわれを留めさせている要因は何かを厳密に見極めるため、詳細にそれを研究し、そして、覚醒への希望と覚醒のための方法を提供したのである。もし部外者である催眠術師がわれわれにこれほど大きな影響を及ぼしうるなら、われわれが自分自身の心を支配することができたら、どんなことが可能になるであろう？ 部外者たる催眠術師もまた、おそらくわれわれとちょうど同様にトランス状態にあるという点で、制限されている。仮にわれわれが自分自身の支配者であり、目覚めているとしたら？ 目覚めたままでのトランスの性質、および目覚めるための可能性——それが本書の主題である。

【原注】

(1) タート【意識の諸状態】。

(2) R. Shor, "Hypnosis and the Concept of the Generalized Reality Orientation," *American Journal of Psychotherapy* 13: 582-

602; R. Shar, "Three Dimensions of Hypnotic Depth," *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis* 10: 23-38; さらびに C. Tart, ed., *Altered States of Consciousness: A Book of Readings* (New York: Doubleday, 1971).

(3)

私はまた、第十章の含意的トランスの議論を拡充するため、選択的に強調しておいた。催眠についてのより包括的な見解に関心がある読者は、拙著「意識の諸状態」および「変性意識状態」中のいくつかの適切な章を参照していただきたい。

第十章 合意的トランス——日常生活における眠り

トランス *trance* (1) 生気の部分的な停止状態、あるいは機能不全状態。ほうつと

した(眩惑)状態。茫然自失状態。(2) 宗教的黙想の場合のような深い放心状態

(忘我の境)。エクスタシー。(3) 深い催眠状態のような眠りに似た状態。

—— Webster's New Collegiate Dictionary (1973)

本章では、われわれの日常の、「正常な」意識状態を検証するが、しかしそれを、催眠現象を調べたような仕方で見つめることにしよう。その中で日常的意識が発達する仕掛けとはどんなものなのだろう？ それを創り出すための誘導手順とはどんなものなのだろう？ 「催眠術師」が引き出すことができる現象とはどんなものなのだろう？ 通常の意識は合意的トランスとして言及されるであろう。その場合、催眠術師に相当するのは擬人化されたものとしての「文化」である。「被験者」——このプロセスに従う人——それはあなたである。

これは、初めはどこか不自然に聞こえるかもしれないが、しかし合意的トランスは通常の催眠よりはるかに浸透しており、強力で、人為的な状態であり、そしてきわめてトランスに似ているということが、次第にわかってくるであろう。合意的トランスは、われわれの本質的活力の多くの喪失を伴

う。それは、(完璧なまでに) 生気の部分的な中断状態であり、機能不全状態であり、ぼうつとした(眩惑)状態、茫然自失状態である。それはまた、深い放心状態——直接的に感知され、本能的にとらえられる現実から、現実についての抽象物への大幅な退却——でもある。エクスタシー状態としてのトランスの定義に関しては、合意的トランスはその報いを持ってはいるが、しかしそれを「エクスタシー」と呼ぶことは問題である。

覚えておいていただきたいことは、本書のパート2の力点は人間の日常生活の病理を診断することに置かれているということである。われわれをこんなにも不幸にする生活というものには、何が欠けているのだろうか? 愛、勇気、慈悲心、創造性、およびその他の肯定的な側面には、後で関心を向ける。ここでは、文化および合意的トランス誘導の否定的な面を強調していくことにしたい。にもかかわらず、われわれは文化を必要とする。文化はわれわれに莫大な恩恵を与え、そこからわれわれに可能な未来の進化が起らなければならぬ母体である。また、合意的トランスの誘導プロセスが不完全であることも心に留めておこう。われわれは皆、自分自身の日常的意識を独特に形作ってきた独自の個人史を持っている。ちょうど人々の被催眠性に相違があるように、われわれの合意的トランスがどの程度深いか人も人によりまちまちである。したがって、以下に描かれた様相はあまりにも紋切り型であり、あまりにも単純化されている……けれども、あまりにも正確である。

文化

人類学者たちは文化というものを、世界についての基本的信念および世界に対処するための慣行を

共にする人々の集団と定義している。人々は、集団の存続を確実にするだけでなく、自分たちの基本的信念の強化や永続化を保証するような仕方でも、相互に作用・影響しあう。われわれが中国人のことを調べてみると、彼らには、エスキモー人や英米人の場合とは全く異なる世界についての信念があることがわかる。

文化の相対性

人類学はわれわれの理解に独特の寄与をなしてきた。多くの文化間の相違点ならびに類似点についての詳細な文献を研究することによって、われわれの文化的信念の多く（ほとんどではないにしても）の相対性に個人的に気づくためのより良い機会を持つ。聡明な人々——一つの文化として存続するという基本的試練を経てきた人々——の社会は、われわれが明白あるいは神聖だと思つていて多くの多くについて、全く異なった信念を持つている。われわれが世界について明白だと思つていて多くの多く、神聖な真理だとみなしていることの多くは、問い質すことができ、またそうされるべきである。

一例として、私はしばしば私のクラスの学生たちに次のような仮定的状況を提示する。「君たちの兄弟がたつた今殺された。殺人者が誰か君たちは知つている。君たちのうちの何人が警察を呼ぶだろう？」普通、全員の手が挙がる。もし、それから、警察を呼ぶことを恥辱や不名誉だと感じる人はどのくらいいますかと私が尋ねると、当惑したしかめ面を向けられる。教授、あなたは何を言いたいのですか？

ごく少数の文化の観点から見れば、このクラスは、人間社会のくず、遠ざけられるべき恥ずべき人

間から成っていることをおのずから暴露してしまったのである。一人の肉親（血族）が殺された時、それは家族なのである。個人的に自分の家族の恨みを晴らすことは、個人的な名誉の問題なのだ！この人たちは名譽挽回を計り、個人的に殺人者に復讐するつもりだろうか？ いや、彼らはその事件の処理をよそ者——お金と引き換えにそれを行うよそ者（警察）——の集団に一任するであろう！なんと人間は墮落しうるものか！ あなたが異国人を信頼できず、世界がこんなにもひどい場所になつているとしても、なんの不思議もない！

文化適応

われわれが生まれた時、われわれは、発達させられるのを待っている潜在能力、可能性のかたまりである。けれども、われわれは潜在能力に関して完全に中立的な環境に生まれ落ちるわけでも、潜在能力の全てを発達させようと試みる環境に生まれ落ちるわけでもない。われわれは、家族の一員を殺す誰かに個人的な復讐し、自分が立派な名誉あることをしたと誇りに感じる潜在能力を持って生まれる。あるいは、警察にその処理を一任するのが良いと感じる潜在能力を持って生まれる。これらの潜在能力の両方とも発達させられる見込みはないであろう。

われわれは皆、一つの文化——すなわち、共有される信念体系、物事がどうあるか、どうあるべきかについての合意を有する人々の集団——の中に生まれ落ちる。われわれが生まれるやいなや、文化は、主に親を媒介にしてわれわれの潜在能力を選別し始める。いくつかは良いとみなされ、積極的に奨励される。長い間われわれの文化では明らかに適切であったが、しかし今は問題視されるように